資料紹介

# 高村光太郎の未発表書簡

安藤勝志

詩人の書簡は詩人研究の資料としてきわめて重要である。

このたび、私は名古屋市で耳鼻科の医師をしておられる村山顕次氏の御好意により、同氏所蔵の高村光太郎の書簡を拝見する機会を得た。村山氏は明治三八年（一九〇五）のお生まれで、医学を学んでおられた大正末期に光太郎の家へ出入りされたり、武者小路実篤の新しき村に参加されたりしたこともある方である。

村山氏蔵の書簡（葉書四・封書一）は大正一二年（一九二三）から大正一四年（一九二五）までのものである。これらは未発表の書簡であり、光太郎研究の資料として重要であると思われるので、ここに村山氏のお許しを得て紹介する次第である。

㈠（府下巣鴨宮仲／二〇〇三／宮尾様方／村山顕次様／六月十七日／駒込林町二十五／高村光太郎）

御葉書拝見、必ず御待ち出來る日が無かつた爲めおしらせが出來ずに居ました。來週も仕事の都合上さうかも知れませんが、夜六時過から御暇の時御持参下されば存宅の時はいつでも拝見いたします。もし其時外出中でありましたら誠にお氣の毒になりますが、どういふ都合になるか分りませんので、萬一御無駄足になつたら御免下さい。（葉書一一行）

右の書簡は大正一二年（一九二三）のもので、村山氏が神農の像の鑑定を依頼したことに対する光太郎の返事である。神農の像はいうまでもなく医薬の祖として医家に祭られている像のことである。村山家は小田原の古い医家であり、村山氏の祖父玄全は杉田玄白の弟子であつた。したがつて、村山家には古い神農の像が伝わつていた。当時の村山氏は朝鮮の京城医専を休学中で、家蔵の神農の像を売却しようとして、光太郎に鑑定依頼の葉書を出したのである。後日、この鑑定は実現したということである。光太郎は「あまり良いものではないが、そんなに悪いものではないから大事にしなさい。」という意味のことを言つたそうである。

㈡（日向國兒湯郡／木城局區内／新しき村／村山顕次様／駒込林町二十五／高村光太郎／十二月二十三日）

おてガミなつかしく拜見いたしました、あの「神農の像」は今でもおぼえてゐます。燒失したのは惜しい事です、ヱルハアランの譯詩についてそんなに喜んで下さつた事を私も心から喜びます、人の喜を知るほどうれしい事はありません、ヱルハアランの譯は曠野社に（原文抹消）（原稿）校正刷がありますから或は來年あたり出版されるのかも知れません。若し出版されたら早速お送りいたします、とりあゑず（原文抹消）（御）一寸。御健康をいのります、

（葉書一二行）

右の書簡は大正一三年（一九二四）のもので、村山氏が近況と光太郎のヴェルハーランの訳詩についての感動を書き送った手紙に対する返事である。当時の村山氏はトルストイの作品を愛読する文学青年であり、宮崎県の新しき村に参加していた。新しき村では、主として会計の仕事をしていたということである。光太郎が新しき村に対する理解を深めた理由のひとつとして、村山氏との関係をあげてもよいと思われる。葉書に神農の像が焼失したとあるのは事実ではない。村山氏が実際には売却してしまったのであるが、前に鑑定を依頼した時のこともあり、焼失したと知らせたためである。光太郎にとって、この神農の像は印象深いものであつたようである。なお光太郎には「夢に神農となる」（昭和一二年一一月四日作）という詩がある。ヴェルハーラン（Émile Verhaeren 一八五五―一九一六）には、処女詩集“Les Flamandes”をはじめ多くの詩集があるが、一九一六年一一月に汽車の車輪に触れて死亡している。

㈢（日向國／宮崎縣兒湯郡／木城局管内／新しき村ニテ／村山顯次兒／駒込林町二十五／高村光太郎／六月三日）

別封でヱルハアラン「天上の炎」をお贈り志ました、もつと早く市へは出たのですがいろいろの都合でお送り出來ずにゐました。立派な原詩をきづつけたやうに思つてはづかしい氣がしますが無いよりはましといふ程度でよんで下さい。今年は時候がわるいやうですから御用心專一、（葉書一〇行）

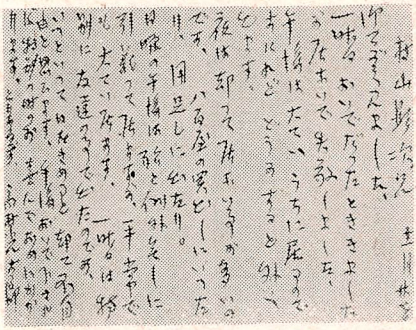
右の書簡は大正一四年（一九二五）光太郎が訳詩集『天上の炎』（新しき村出版部大一四・三）を村山氏に贈った時のものである。「天上の炎」はヴェルハーランの“Les Flammes hautes”を光太郎が翻訳したもので、その出版にあたっては村山氏も関係している。なお光太郎には評伝「ヱルハアラン」もあり、ヴェルハーランが光太郎に与えた影響は大きい。

㈣（日向國兒湯郡／木城村局區内／新しき村／村山顯次兒／駒込林町二十五／高村光太郎／六月十二日）

おてガミ見ました、譯詩集をよろこんで下さつてありがたう、譯ははづかしいけれど、讀む人には原詩の精神が自然と出て來るものと思つて安心してゐます。おたずねのアレキサンドランといふのは詩の一音節を十二綴音で書いた古風な詩の一體です。自由詩の起らない前に多く詩人の用ゐた詩體でユーゴーなどは此で澤山書いてゐます。「天上の炎」の中の「昔の信仰」などもさうです。ヱルハアランの詳傳のやうなもの、英語にもあるのでせうけれど、今知りません。心懸けてゐて知れたらおしら

せしませう。（葉書一三行）

右の書簡は大正一四年（一九二五）村山氏が訳詩集『天上の炎』とヴエルハーランの英文詳伝の有無について質問したことに対する光太郎の返事である。村山氏は『天上の炎』の序文に「自由律とはいつても、原詩は皆韻がふんであり、中にはアレキサンドランで書かれたのさへあるが、訳詩は日本語の性質上皆自由詩にした。」とあるので、アレキサンドランという詩体について質問したのである。アレキサンドランはフランス詩の Alexandrin のことであり、光太郎が説明しているような詩体である。ユーゴーの外にボードレールも用いている。なお「昔の信仰」は『天上の炎』に訳出されている。



㈤（芝區三田四國町／二ノ四號／フキギン氏方／村山顯次兄／駒込林町二十五／高村光太郎）

村山顯次兄

十一月二十七日

御てガミ見ました、一昨日おいでだつたとききましたが居ないで失敬しました、午後は大ていうちに居るのですけれどどうかすると外へ出ます、夜は却つて居ない事が多いのです、八百屋の買出しにいつたり、用足しに出たり。日曜の午後は殆と例外無しに引籠つて居ますが、平常でも大てい居ます、一昨日は特別に友達の事で出たのです、いつといつて日をきめると却て不自由と思ひます、午後おいで下されば特別の時の外喜んでおめにかかります、とりあゑず、高村光太郎（封書一八行）

右の書簡は大正一四年（一九二五）村山氏が高村家訪問の都合を問い合わせた時の返事である。訪問の用件は朝鮮の磁器の見方を光太郎に聞くためであつた。当時の村山氏は英国人の牧師の家に寄寓していたが、再び朝鮮へ渡ることになつたのである。大邸医専で医学を学ぶためであつた。村山氏は慶州の磁器に興味をもつていたので、その見方を光太郎に聞いてから出発したのである。書簡中に「八百屋の買出しにいつたり、用足しに出たり。」とあるが、そのころの光太郎と智恵子は一日交代で食事の準備をしていたという。まだ智恵子が健康であつたころのことである。

以上で高村光太郎の未発表書簡に関する紹介を終ることにしたい。なお本稿執筆にあたつては、所蔵者の村山顯次氏、同氏御令息高康氏をはじめ多くの方々の御好意をたまわつた。誌上をかりて謝意を記しておく。